

企画セッション | 部会・連絡会セッション：核不拡散・保障措置・核セキュリティ連絡会

📅 2021年9月9日(木) 13:00 ~ 14:30 | 📍 K会場

[2K_PL] 国際社会の核不拡散等分野における日本の一層の貢献・邦人の活躍に向けて

座長：宇根崎 博信 (京大)

[2K_PL01] IAEAの現状と将来、そして日本人職員の活躍に向けた取組

*齋藤 敦¹ (1. 外務省)

[2K_PL02] IAEAにおける保障措置等核不拡散への取り組みとその経験(国際原子力機関勤務への勧誘)

*久野 祐輔¹ (1. 元IAEA)

核不拡散・保障措置・核セキュリティ連絡会セッション

国際社会の核不拡散等分野における日本の一層の貢献・邦人の活躍に向けて
Toward further contribution of Japan and success of Japanese in the field of nuclear non-proliferation and other area in the international society

(1) IAEA の現状と将来、そして日本人職員の活躍に向けた取組

(1) Now and Future of the IAEA and Efforts to Help Japanese Take Active Roles in the IAEA

*齋藤 敦¹¹ 外務省

1. はじめに

国際原子力機関（IAEA）は、よく「核の番人」、英語でも「nuclear watchdog」と呼ばれるが、その役割とマンデートは非常に幅広い。具体的には、原子力の平和的利用の促進に関する分野と、原子力が平和的利用から軍事的利用に転用されることを防止するための保障措置の分野に大別されるが、本セッションでは、まず IAEA の取組の現状と将来の展望、具体的には平和的利用分野では、新型コロナウイルス対策に係る取組及び海洋プラスチック対策等を通じた持続可能な開発目標（SDGs）達成に向けた取組、不拡散分野では、北朝鮮やイランの核問題への取組について紹介する。セッションの後半では、日本政府全体で取り組んでいる日本人職員の増加及び昇進に向けた支援について、IAEA における現状や課題を取り上げる。

2. IAEA の取組の現状と将来の展望

原子力は、発電のみならず、保健・医療、食糧・農業、環境、産業応用などの分野でも活用されている。これら非発電分野での原子力の平和的利用の促進と開発課題への貢献は、開発途上国が NPT 加盟国の大半を占める中で重要性が増してきている。IAEA も、開発途上国への技術協力を行うとともに、SDGs 達成に向けて取り組んでいる。

北朝鮮は 2002 年に IAEA の査察官に退去を通告して以降、IAEA による査察を長い間受け入れていないが、IAEA は北朝鮮の核開発の状況を監視・検証し、定期的に報告を行い、また IAEA 総会の場合でも、例年決議を採択している。我が国を含む国際社会は、一体となって国連安保理決議を完全に履行していくとともに、関係国とも連携しながら、引き続きこうした IAEA の努力を支援していく。イランについて、IAEA は、2016 年 1 月以来、いわゆるイラン核合意の履行の監視・検証を継続的に行っている。

3. 国際社会で活躍する日本人

IAEA を含む国際機関は、国際社会共通の利益のために設立された組織である。世界中の人々が平和に暮らし、繁栄を享受できる環境作りのために、様々な国籍の職員が集まり、それぞれの能力や特性をいかして活動している。国際機関が業務を円滑に遂行し、国際社会から期待される役割を十分に果たしていくためには、専門知識を有し、世界全体の利益に貢献する能力と情熱を兼ね備えた優秀な人材が必要である。日本は、これら国際機関の加盟国として政策的貢献を行うほか、分担金や拠出金の拠出を行っている。また、日本人職員の活躍も広い意味での日本の貢献と言える。IAEA においては、2009 年から 2019 年まで、故天野之弥氏が事務局長を務めた。

現在、900 人以上の日本人が専門職以上の職員として世界各国にある国連関係機関で活躍しており、過去最多となった。日本人職員の更なる増加を目指し、日本政府は 2025 年までに国連関係機関で勤務する日本人職員数を 1,000 人とする目標を掲げており、その達成に向けて、外務省は、大学や関係府省庁、団体などと連携しつつ、世界を舞台に活躍・貢献できる人材の発掘・育成・支援を積極的に実施している。

IAEA も日本人が活躍できる国際機関の一つである。外務省では、関係省庁や団体、企業と定期的に連絡会議を開催し、情報共有の場を設けている他、本年 5 月には、初めての試みとして、IAEA 人事部と共催で「IAEA

による採用オンラインワークショップ」を実施する等、IAEA での日本人職員増加を支援している。

*SAITO Atsushi¹

¹Ministry of Foreign Affairs

核不拡散・保障措置・核セキュリティ連絡会セッション

国際社会の核不拡散等分野における日本の一層の貢献・邦人の活躍に向けて
Toward further contribution of Japan and success of Japanese in the field of nuclear non-proliferation and other area in the international society

(2) IAEA における保障措置等核不拡散への取り組みとその経験

(国際原子力機関勤務への勧誘)

(2) Activities and experiences in the field of nuclear nonproliferation in IAEA
(Promotion to apply to IAEA)

*久野 祐輔¹

¹元 IAEA 保障措置局 分析業務部長

国際原子力機関（IAEA）は、1957 年以来 64 年間にわたり世界の平和と繁栄のために原子力の貢献を促進するとともに、原子力技術が軍事転用されないための保障措置を実施するという重要な役割を担ってきた。一方近年では、非国家主体による核テロを防止するために核セキュリティ分野においても国際的なイニシアティブをとる機関となっている。一般に「核不拡散」の概念は、非核兵器国が平和利用の権利と推進の恩恵を享受すると同時に、核兵器を持たないことを国家がコミットする、また核兵器国は軍縮へ取り組むという原理原則に基づいているが、現実には、必ずしもそのような考え方を満足する状況に至っているとは言い難く、特に、地政学的に厳しい環境にあるいくつかの非核兵器国からすれば、このような考え方は容易には受け入れ難いということになる。IAEA の活動は原子力の平和利用の奨励・援助に関する機能と平和利用を担保するため保障措置等を実施するという役割の両局面を有するが、その背景には、大国である核兵器国の「核不拡散」推進という強い思惑があるため、IAEA 自体が技術集団であるにも関わらず、そこにおける議論には常に政治・政策論争を伴ってきた。

筆者は、1999 年-2006 年および 2015-2020 年の計 12 年にわたり IAEA における保障措置、中でも核物質分析技術を専門とするシニアスタッフとして勤務する機会に恵まれたが、この間、原子力平和利用と核不拡散をめぐる国際情勢は、大きく変化していった。1999 年頃といえば、IAEA の保障措置において新たに導入された追加議定書に基づく未申告活動の検知が実質的に始まった時期であり、新たに開発された検知技術は、イラク・イランそして北朝鮮などの問題の解明に使用され、数々の有益な情報をもたらした。北朝鮮のように IAEA 査察を拒否し事実上核兵器保有国となったケースがある一方で、イラン問題のように核兵器開発疑惑国であるにもかかわらず、IAEA 査察を受け入れ続けるケースもあり、IAEA としては、JCPOA 核合意の基に追加議定書に準ずるレベルでの査察を実施し、国連安保理への報告の基となる多くの情報を入手し、加盟国とともに核兵器開発阻止へ取り組んできた。イラン問題が始まったのが筆者の第 1 回目の勤務開始の数年後であり、イラン核合意が成立したのが 2015 年、すなわち筆者の第 2 回目の IAEA 勤務が始まったタイミングでもあったことから、当時は一国の核問題の解決にかくも長き時間を要するものかとその大変さを改めて認識させられたものである。その後、解決に向かう兆しなど時折見られたものの、米トランプ政権の核合意からの脱退を契機に状況は悪化、今年になりイランおよび敵対するイスラエル双方の政権が交代するなどますます先行き不透明な政治情勢になりイラン核問題は混迷の極みという状況に至っている。原子力技術者として、これまで IAEA の対イラン保障措置に貢献できたという自負がある一方で、IAEA が長年行ってきた並々ならぬ努力が報われるか又は無駄になるかは、社会情勢および当事国政権の政策によって大きく左右されるという事実については、何とも受け入れ難い思いである。

筆者は、1979 年に動燃（現原子力機構）入社以来、原子力技術者としての東海再処理工場に約 20 年勤めたのち IAEA 勤務することとなったが、入社当時は、日米再処理交渉が決着を迎えようやく同工場（当時は建設所）が稼働し始める時期であり、まさに IAEA の査察官が活動を開始するというタイミングであった。入

社当時は、不勉強につき、なぜ IAEA 職員が毎日のように施設内に入り込み多くの要求をしていくのか理解できず、IAEA に対し大いに不満を募らせていたものであるが、これが後々その国際機関への勤務に繋がるきっかけとなるとは人間塞翁が馬である。技術畑の人間は、一般に 40 年余りの就業期間において、その専門分野を極めるということで達成感や喜びを感じることができるが、社会はその間刻々と変化していき、各国の政治情勢や社会のニーズも変わっていく。IAEA のような多国籍職員からなる国際フィールドにおいて原子力技術者としてその専門分野を生かすことは、国内での就業とは一味違った経験を持つことができ、国際社会のニーズの変化を多国間の協力や政治的駆け引きなどを通し感じ取ることができるなど、より広い視野で原子力を考える好機であると考ええる。

本講演では、最近の IAEA の活動について保障措置などを例にとり紹介するとともに、IAEA 応募の要領や仕事の仕方、さらに国連関連組織で働くことによる得点や IAEA 本拠地ウィーンでの生活について紹介する。

* Yusuke Kuno ¹

¹ Former Director of IAEA Office of Safeguards Analytical Services